

化銀杏

泉鏡花

一

貸したる二階は二間にして六疊と四疊半、別に五疊餘りの物置ありて、月一圓の極なり。家主は下の間の六疊と、奥の五疊との二間に住居ひて、店は八疊ばかり板の間になり居れども、商賣家にあらずれば、晝も一枚蓆をおろして、こゝは使はずに打捨てあり。

往來より突抜けて物置の後の園生まで、土間の通庭になり居りて、其半ばに飲井戸あり。井戸に推竝ぴて勝手あり、横に二個の竈を竝べつ。背後に三段ばかり棚を釣りて、こゝに鍋、釜、搗鉢など、勝手道具を載せ置けり。厠は井戸に列して其あはひ遠からず、然も太く濁りたれば、漉して飲用に供し居れり。建て、數十年を経たる古家なれば、掃除は手綺麗に行届き居れども、其處ら煤ぼりて餘りあかるからず、すべて少しく陰氣にして、加賀金澤の市中に

てもこのわたりは淺野川の河畔一帶の濕地なり。

園生は、一重の垣を隔て、畑造りたる裏町の明地に接し、李の木、ぐみの木、柿の木など、五六本の樹立あり。沓脱は大戸を明けて、直ぐ其通庭なる土間の一端にありて、上り口は拭き込みたる板敷なり。これに續ける六疊は、店と奥との中間にて、土地の方言茶の室と呼べり。其茶の間の一方に長火鉢を据ゑて、背に竹細工の茶棚を控へ、九谷焼、赤繪の茶碗、吸子など、體裁よく置きならべつ。うつむけにしたる二個の湯呑は、夫婦別々の好みにて、對にあらず。

細君は名をお貞と謂ふ、年紀は二十一なれど、二つばかり若やぎたるが、此長火鉢のむかうに坐れり。細面にして鼻筋通り、遠山の眉餘り濃からず。生際少しあがりて、髪はやゝ薄けれども、色白くして口許緊り、上氣性と見えて唇あれたり。ほの赤き臉の重げに見ゆるが、泣はらしたるとは風情異り、譬へば炬燵に居睡りたるが、うつとりと覺めしものゝ如く、涼しき眼の中曇を帯びて、見るに倂晴やかなら

ず、暗雲あんうん一帶いったい眉宇びうをかすめて、渠かれは何なにをか物思ものおもへる。
根上ねあがりに結ゆひたる圓鬚まるまげの鬢類びんほに亂みだれて、下占したじめばかり
帯おびも占しめず、田舎いなかの夏なつの風俗ふうぞくとて、素肌すはだに紺縮こんちゆみ
の浴衣ゆかたを纏まとひつ。あながち身みだしなみの悪わるきにあら
ず。

教育けういくのある婦人ふじんにあらねど、ものゝ本ほんなど好このみて
読よめば、文書ふみかく術すべも拙つたなからで、はた裁縫さいほうの業わざに長たけ
たり。

他たの遊藝いうげいは知しらずと謂いふ、三味線さみせんは其好そのすきの道みちに
て、時ときありては爪弾つびきの、忍しのぶ戀路こひぢの音ねを立たつれど、
夫をとこは學校がくかうの教授けうじゆたる、職務上しよくむじやうの遠慮えんりよありとて、公おほやけに
弾ひくことを禁きんじたれば、留守るすの間まを見計みはからひ、細棹ほそざを
の塵ちりを拂はらひて、慎つましげに音ねメをなすのみ。

お貞ていは今思出いまおもひだしたらむが如ごとく煙管きせるを取りて、覺束おぼつか
無なげに一服吸いっぷくすひつ。

渠かれは煙草たばこを嗜たしむにあらねど、憂うきを忘わすれ草くさといふに

頼りて、飲習はむとぞ務むるなる、深く吸ひたれば
思はず咽せて、落すが如く煙管を棄て、湯呑に煎茶
をうつしけるが、餘り沸れるまゝ其冷むるを待てり。

時に履物の音高く家に入來るものあるにぞ、お貞
は少し慌だしく、急に其方を見向ける時、表の戸を
がたりとあけて、濡手拭をぶら提げつゝ、衝と入り
たる少年あり。

お貞は見るより、

「芳さんかえ。」

「奥様、唯今。」

と下駄を脱ぐ。

「大層、おめかしだね。」

「ふむ。」

と笑ひ捨て、少年は亂暴に二階に上るを、お貞は
秋波以て追懸けつゝ、

「芳ちゃん！」

「何？」

と顧みたり。

「まあ、此處へ來て、些少お話しなね。お祖母様

はいま晝寝をして在らつしやるよ。騒々しいねえ。」

「さうかい。」

と下りて来て、長火鉢の前に突立ち、

「あゝ、喉が渴く。」

と呷きながら、湯呑に冷したりし茶を見るより、

無遠慮に手に取りて、

「頂戴。」

とばかりぐつと飲みぬ。

「あら！ 酷いのね、此人は。折角冷して置いた

ものを。」

故と怨ずれば少年は微笑みて、

「餘つてるよ、奥様はけちだねえ。」

と湯呑を返せり。お貞は手に取りて中を覗き、

「何だけも残しやアしない。」

と底の方に残りたるを、薬のやうに仰ぎ飲みつ。

「まあ、芳さんお坐ンな、而して何故人を、奥

様々々ツて呼ぶの、嫌なこツた。」

「だつて、圓鬚に結つてるもの、銀杏返の時は姉

様だけれど、圓鬚の時や奥様だ。」

お貞はハツとせし風情にて、少年の顔を瞻りしが、腫ぼつたき眼に思ひを籠め、

「堪忍おしよ。それはもう芳さんが言はないでも、私は此通り髪も濃くないもんだから、自分でも束ねて居たいと思ふがね、旦那が不可ツて言ふから仕様がないのよ。」

「だから矢張奥様ぢやあ無いか。」

と少年は平氣なり。お貞はしをれて怨めしげに、

「だつて、他の者なら可いけれど、芳さんにばかりは奥様ツて謂はれると、何だか他人がましいので、頼母しくなくなるわ。せめて「お貞さん」とでも謂つておくれだと嬉しいけれど。」

とためいきして、力なげなるものいひなり。少年は無雑作に、

「ぢやあ、お貞さんか。」

と言懸けて、

「何だか友達の様に聞えるねえ。」

「だから矢張、姉さんが可いぢやあないかえ。」

「でも圓鬘に結つてるもの、銀杏返だと亡なつた

姉様にそつくりだから、姉様だと思ふけれど、鬘
ぢやあ僕は嫌だ。」

と少年は素気なし。

「ぢやあ全然あかの他人なの？」

「なに左様でもないけれど。……」

少年は言定みぬ。お貞は襟を掻合せ、浴衣の上前
を引張りながら、

「それだから昨日も髪を結はない前に、如彼に芳
さんにあやまつたものを。邪慳ぢやあないかね。可
いよ、旦那が何といつても、叱られても大事な
私や直引毀して、結直して見せようわね。」

お貞は顔の色尋常ならざりき。少年は少し弱りて、
「それでなくツてさへ、先達のやうな騒がはじま
るものを、そんなことをしようもんなら、其こそだ。
僕アまた駈出して行かにやあならない。」

「眞個に、あの時は。ま、何うしようと思つたわ。
芳さんは駈出してしまつて二晩もお歸りでないし
八おばあさんはまた大變に御心配遊ばして何うした
ら可からうとおつしやるし、旦那は旦那でもものも言
はないで、黙つて考へ込んでばかり居るしね、私は

もう、面目ないやら、恥しいやら、申譯がないやらで、ばうツとしてしまつたよ。後で聞くと何だつさ、眞蒼になつて寝て居たとさ。

芳様の聲音が聞えたので、はツと氣が着いて駈出したが、其まで何うして居たんだか、まるで夢のやうで、分らなかつたよ。」

「僕はまた髯がさ、（水上さん）て呼ぶから、何だと思つて二階から覗くと、姉様は突伏して泣いてるし、髯は壇階子の下口に突立つて、憤然とした顔色で、（直ぐと明けて貰ひたい。）と失敬なことを謂ふぢやあ無いか。だから僕は不愉快で堪らないから、其から其まんまで、家を出て、何處か可い家があつたらと思つたけれど、探す時は無いもんだ。それから友達の處へ泊つて、牛を奢つてね、トランプをして遊んで居たんだ。僕あ一番強いんだぜ。滅茶々に負かして惡體を吐いて遣ると、大變に怒つてね、たう／＼喧嘩をしちまつたもんだから、翌晩は其處に泊ることも出来ないの、仕方が無いから歸つて來たんだ。」

お貞は聞きつゝ睨む眞似して、

「憎らしいねえ。人の氣も知らないで、お友達とトランプも無いもんだね。氣が違やあしないかと、私や自分でさう思つた位だのにさ。」

「でも僕あ歸つた時、（芳さん！） てつて奥から出て来た、あの時の顔にや吃驚したよ。暮合ではあるし、亡なつた姉さんの幽霊かと思つた。」

「いやな！芳さんだ。恐いことね。」

お貞は身震ひして横を向きぬ。少年は微笑みたり。

「何だ、臆病な。晝ぢやあ無いか。」

「でもそんなことをお言ひだと、晩に手水に行かれやしないや。」

「其様に臆病な癖にして、昨夜も髯と二人連で、怪談を聞きに行つたぢやあ無いか。」

お貞はまじめに辯解して、

「はい、ですから切前に歸りました。切前は茶番だの、落語だの、そりや何んなにかおもしろいよ。」

「それぢやもう髯の御機嫌は直つたんだね。」

「別に直つたといふでもないけれど、まあ如彼ものさ。あれでもね、おばあさんには大變氣の毒がつてね、（お年寄がやう／＼落着なされたものを、またお轉宅は大抵ぢやアあるまいから、其内可い處があつたら、御都合次第お引越しなさるが可し、また一月でも、二月でも、家においでになつても差支へはございませんから）ツて、其ツ切になつてるのよ。其代ね、私にや、（芳さんと談話をすることは決してならない）ツて、固くいひつけたわ。矢張疑ぐつて居るらしいよ。」

少年は火箸を手にして、ぐい／＼灰に突立てながら、不平なる顔色にて、

「一體疑ぐるツて何だらう。僕のおばあさんにもね、姉様、髯が、（お孫さんも出世前の身體だから、云々が着いてはなりませんまい。私は、私で、内の貞に氣を着けますから、あなたもその處おぬかりなく。）ツさ。内證で言つたさうだ。變ぢやないか、え、姉様、何を疑ぐツて居るんだらう。何か

僕と、姉様と、不道徳な關係があるとしても言ふこと
なんかね、其だと失敬極まるぢやあ無いか、え、姉
様。

と詰り問ふに、お貞は、

「あゝ。」

と生返事、胸に手を置き、差俯向く。

少年は安からぬ思ひやしけむ。

「ぢやあ何だね、此間あの騒ぎのあつた前に、二
人で奥に談話をして居た時、髯が戸外から歸つて來
たので、姉様は、あわアくつて駈出したが、その故
なの？ 一體氣が小さいから不可いよ。何時に限ら
ずだ、人が、がらりと戸を開けると、何だか大變な
ことでも見付かつた様に、どぎまぎして、ものをい
ふにも呼吸をはずまして、可訝いだらうぢやないか。
先刻僕の歸つた時も、戸をあけると、吃驚して、何
だかおど／＼しておいでだつたぜ。此間の時だつて
も左様だ。髯に向つて、（入らつしやいまし）
自分の亭主を迎へるとつて、（入らつしやいまし）

なんて、言ふ奴があるものか。何だつてさう氣が
小さくツて、物驚きをするんだなあ。それだから疑

ぐられるんだ。不可ねえ。」

お貞は淋しげなる微笑を含み、

「左様いつてながら芳さんも彼の時は矢張そゝツかしく、二階へ駈け上つたぢやあないかね。」

少年は別に考ふる體もなく、

「そりや何だ、僕は何も恐いことはないけれど、あの髻が嫌だからだ。何だか蟲が好かなくツて、見ると癩に障るつちやあない、僕あもう大嫌だ。」

と臆面もなく言うて退けつ。渠は少年の血氣にまかせて、後前見ずにいひたるが、さすがに其妻の前なるに心着きけむ、お貞の色をうかゞひたり。

お貞は氣に懸けたる状もなく、却つて同意を表する如く、勢なげに歎思して、

「誰が見てもちがひはないねえ。私だつて矢張嫌だわ。だがね、芳ちゃんは、何故好かないの。」

少年はお貞の言の吾が意を得たるに元氣づきて、聲の調子を高めたり。

「他にね、斯うといつて、まだ此家へ来て、そん

なに間もないこつたから、何處に何うと謂ふ取留た
こともないけれど、唯ね、髯の様子がね、亡なつた
姉様の亭主に肖て居るからね、その故だらうと思ふ
んだ。」

「而して、不可いお方だつたの。」

少年はそゞろに往時を追懐すらむ、慨然としたり
けるが、

「不可い處の騒ぢやない、姉様を殺した奴だもの。」

お貞は太く感ぜし状にて、

「まあ。」

と其うるみたる眼をニりぬ。

「酷い人ね、何だツてまた姉様を殺したんだらう
ね。芳さんのお姉様なら、何様にか優しい、佳い人
だつたらうのにさ。」

「そりや、眞實に僕を可愛がつてくれたツちやあ
ないよ。今着て居る衣服なんか、臺なしになつて
けれど、姉様が故と縫つて寄來したもんだから、大
事にして着て居るんだ。」

「其せぬで似合ふのかねえ。」

とお貞は今更の如く少年の可憐なる状ぞ瞻られけ

る。水上^{みなかみよし}之助^{のすけ}は年^{とし}紀^じ十六^{ふろく}、其^{その}いふ^{ところ}處^{ところ}、行^{おこな}ふ^{ところ}處^{ところ}、無^{むじ}
邪^や氣^きなれどもあどけなからず。辛^{しん}苦^くの^{うち}に^{おひ}生^{おひ}た^ち
て浮^う世^{きよ}を^し知^しれる^{さま}状^ま見^みえつ。ものゝいひ^ぶり^はき^{／＼}
して、齡^{よはひ}の^{わり}には^{おとな}大人^{おとな}び^{たり}たり。

四

要なければ茲には省く。少年はお蓮といへりし渠の姉が、少き時配偶を誤りたるため、放蕩にして輕薄なる、其夫判事なにがしのために虐遇され、精神的に殺されて入水して果てたりし、一條の慘話を物語りつ。語は簡に、意は深く、最もものに同情を表して、動かされ易きお貞をして、悲痛の涙に咽ばしめたり。

語を繼ぎて少年言ふ。

「姉様も矢張酷いめにあはされるから、其で髯が嫌なんだらう。」

折からぷつ／＼と湯の沸返りて、ぱつと立ちたる湯氣に驚き、少年は慌しく鐵瓶の蓋を外し、お貞は身を斜になりて、茶棚より銅の水差を取下して急がはしく水を注しつ。

「いゝえ、違ふよ。私のはまた全く芳さんの姉さんとは反對で、あんまり深切にされるから、もう賺

で、嫌いやで、ならないんだわ。」

少年せうねんは太いたく怪あやしみ、

「そんな事ことつちやアあるもんでない。何なんだつて優やさしくされて、其それで嫌いやだといふがあるものか。」

「まあさ、お聞ききなね。深切しんせつだといへば深切しんせつだが、どちらかといへば執しつこ着こいのだわ。かいつまんで話はなすがね、一寸聞き貸かをあげるから。」

と菓子皿くわしざらを取とり出して、盛もりたる羊羹やうかんに楊枝やうじを添そへ、
「一ひとツおあがり、いまお茶ちやを入いれ替かへよう。」
と吸き子ふすの茶殻ちやがらを、こぼしにあげ、

「芳よつちゃんだから話はなすんだよ。誰だれにも言いつちや不可いけいよ。實じつは私わたしの父おと親うじんは、中ちう年ねんから少すこし氣きが違ちがつたやうになつて、たうとうそれでおなくなりなすつたがね、親おやのことをいふやうだけれど、母おつか様さんは少すこし了れう簡けん違ちがひをして、父おと親うじんが病びやう氣きのあひだに、私わたしには叔父おじさんだ、弟あにいごと關くわん着ちやくいたの。」

するとお祖ぢ父ふさんのお計はからひで、私わたしが乳ち放ばれをす
るとすぐに二ふ人たりとも追お出ひして、御ご自じ分ぶんで私わたしを育そだて、
十じ三さんの時ときまでお達たつ者しゃだつたが、あゝ、十じ四しの春はるだつ

た。中風でお悩みなすつてから、動くことも出来ない。くおなりで、家は廣し、四方は明地で、穴のやうな處に住んでたもんだから、火事なんぞの心配はないのだけれど、盗賊にでも入られたら、それこそ何うすることもならないのよ。お金子も少々はあつたさうだし。

雇ひの婆さんは居たけれど、耳は遠いし、そんなことの助けにやならず、祖父さんの看病も私一人では覺東なし、確な後見をと言つた處で、また後見なんていふものは、あとでよく間違が出来るものだから、其よりか、一層私に……といふので、親類中で相談を極めて、たうとうあてがつたのが今の旦那の。

其頃ちやうど高等中學校を卒業したので、ま、宅へ來てから、東京へ出て、大學へ入らうといふ相談でね、もと／＼、内の繋りにもなつて貰はなきやあならないといふのでさ、わざと年の違つたのを貰つたもんだから、旦那は二十九で、私は十四。」

お貞は今吸子に湯をばさゝむとして、鐵瓶に手を懸けたる、片手を指折りて數へ見つ。

「十三の違だね。もつとも晩學だとかいふので、大抵なら二十五六で、學士になるのが多いつてね。」

「無論さ。」

と少年は傾聽しながら喙を容れたり。

お貞は煎茶を汲出だして、先づ少年に與へつゝ。

「何だか知らないけれど、御婚禮をした時分は、嬉しくもなく、恐くもなく、まるで夢中で、何とも思やしなかつたが、實はおぢいさんと二人ばかりで、餘所の人の居ない方が、御膳を頂く時やなんか、私や氣が置けなくて可かつたわ。」

變に氣が詰まつて、他人の内へ泊にでも行つたやうで、窮屈で、つまらなくツて、思つて見れば其時分から旦那が嫌ひだつたかも知れないよ。でも大方甘やかされた癖で、我儘の方が勝つたのであらうと思ふ。

其中お祖父さんも安心をなすつたせぬか、大層氣
分も好くなるし、いよ／＼旦那が東京へたつといふ
ので、祝つてたゞしたお酒の座で、ちつと飲やうが
多かつたのがもとになつてね、旦那が出發をした其
おひるすぎに、お祖父様は果敢なくおなりなすつた
のよ。私やもう其時は……」
とお貞は聲をうるましたり。

五

「それからといふものは、私わたしはまるで氣ぬけがしたやうで、内うちの中でも一番薄暗いちばんいすくらい、三疊さんでふの室まへ入はいつちやあ、何どういふものだから、隅すみの方ほうへちやんと坐すわつて、壁かべの方ほうを向むいて、しく／＼泣なくのが癖くせになつてね、長ながい間あひだ治なほらなかつたの。さうかうするうち兒こが出来できたわ。

可笑をかいぢやないかねえ。」

お貞ていは苦にが々くしげに打笑うちあみたり。

「妙なものがころがり出だしてしまつてさ、翌年あくるとしの十月じふぐわつのことなのよ。」

と言いひ懸かけてお貞ていはもの案あんじ顔がほに見みえたりしが、
「さう／＼、芳よつちゃん、まだ其前そのさきにね。旦那だんながさ、
東京とうきやうへ行いつて三月みつきめから、毎月まいつき々々／＼一枚いちまいづつ、月の
朔日ついたちには吃きつと寫真しゃしんを寫うつしてね、缺かかさず私わたしに送おくつて
寄來よこすんだよ。まあ、御深切ごしんせつ様さまぢやないかね。其そのた

んぴに手紙がついてゝ、（いや今月は少し痩せた）
の、（今度は少し眼が悪い）の、（何うだ
せんげつと合はして見、些少あ肥つて見えよう）な
んて、言書が着いてたわ。

私やお祖父さんのことばかり考へて、別に何にも
良人の事は思はないもんだから、一寸見たばかりで、
ずん／＼葛籠の裡へしまひこんで打棄つといたわ。
すると、何時のことだツけか、何かの拍子、お友達
にめつかつてね、
（まあ！お貞さん。旦那様は飛んだ御深切なお
方だねえ。）サ酷く揶つたもんだらうぢやあない
かえ。

其も其筈だね、寫眞の裏に一葉々々、お墨附があ
つてよ。年、月、日、西岡時彦寫之、お貞殿へさ。

私もつい口惜紛れに、（寫眞の儀はお見合せ下
されたく、あまり／＼人につけても）ツさ。何が
あまり／＼だらう、可笑いね。さういつて遣ると、
それツきりおやめになつたが、十四五枚もあつた寫

眞を、また見られちやあ困ると思つたがね、人にも遣られず、焼くことも出来ずさ、仕方がないから、一纏めにして、お持佛様の奥ン處へ容れて置いてよ。毎日拜んだから可いではないかね。」

先刻に干したる湯呑の中へ、吸子の茶の濃くなれるを、細く長くうつしこみて、ぐつと一口飲みたるが、あまり苦かりしにや湯をさしたり。

少年は唯黙して聞きぬ。

お貞は口をうるほして、

「兒が出来る、もう其しく／＼泣いてばかり居る癖はなくなつて、小兒にはかり氣を取られて、他に何にも考へることも、思ふこともなくつて、ま、五歳六歳の時は知らず、其しばらくの間ほど、苦勞のなかつた時はないよ。

すると、其夏の初の頃、戸外にがら／＼と腕車が留つて、入つて来た男があつたの。沓脱に突立つて、案内もしないから、寝かし着けて居た坊やを

置いて、私が上り口に出て行つて、
（誰方、）といつて、ふいと見ると驚いたが、よく／＼見ると旦那なのよ。旦那は旦那だが、見違へるほど瘠せて居て、ま、其も可いが妙な恰好さ。

大きな眼鏡のね、黒磨で以て、眉毛から眼へかけて、頬ツペたが半分隠れようといふ黒眼鏡を懸けて、希代さね、何のためだらう。其上あのそれ呼吸器とかいふものを口へ押着けてさ、おまけに鬚を生やしてるぢやあ無いか。それで高帽子で、羽織がといふと、縞の透綾を黒に染返したのに、五三の何か縫着絞で、少し丈不足といふのを着て、お召が、阿波縮で、淺葱の唐縮緬の兵兒帯をしめてたわ。

何うだい、芳さん、私も思はず知らず莞爾したよ、これは歸つて來たのが嬉しいのより、一層其恰好が可笑かつたせゐなのよ。

病氣で歸つたといふこツたから、私も心配をして、看病をしたがね、胃病だといふので、一寸は快くならない。一月も二月も、さうさ、彼是三月ばかりも

ぶら／＼して、段々瘡せるもんだから、坊やは居るし、私もつい心細くなつて、そつと夜出掛けちやあお百度を踏んだのよ。するとね、其事が分つたかして、

（お貞、そんなに吾を治したいか）　ツて、私の顔を瞻めるからね。何の氣なしで、（はい、あなたがよくなつて下さいませねば、何うしませう、私どもは路頭に立たなければなりません。）　と眞實の處をいつたのよ。

さあ怒つたの、怒らないのぢやあない。（それでは手前、活計のために夫婦になつたか。そんな水臭い奴とは知らなんだ。）　と顔の色まで變へるから、私は弱つたの、何のぢやない、何うしようかと思つたわ。」

「（何故一所に死ぬとは言つてくれない。愛情といふものは、そんな淡々しいものではない。）ツ　ていふのさ。向うから左様出られちゃあ、此方で何とも言ひやうが無いわ。」

女郎や藝妓ぢやあるまいしさ、そんな殺文句が謂はれるものかね。でも、旦那の怒りやうがひどいで、まあ、散々あやまつてさ。坊やがかすがひで、先づそれツきりで治まつたがね、私や其時、あゝ、執念深い人だと思つて、ぞつとして、それからいふものは、何だか重荷を背負つたやうで、今でも肩身が狭いやうなの。

あとでね、あのそら先刻いつた黒眼鏡ね、（烏蜻蛉見たやうに、をかしいぢやアありませんか。）と、病氣が治つてから聞いたことがあつたよ。さうするとね、東京はからツ風で塵埃が酷いから、眼を悪くせまいたための砂除だつていふの、勉強盛なら洋燈をカツカと、ともして寝ない人さへあるんだのに、さう身體ばかり庇つてちゃあ、何にも出来やし

ないと思つたけれど、まさかそんなことをいへたものでもなし、呼吸器も肺病の薬といふので懸けるんだつて。それからね、其髯がまた妙なのさ。」

とお貞は少年の面を見て、

「衛生髯だとさ、おはゝ。分るかえ？」

芳さん。」

「何のこつた、衛生髯つたつて分らないよ。」

「其はね。」

となほ微笑みながら、

「斯うなのよ。何でも人間の身體に附屬したものは、爪であらうが、垢であらうが、要らないものは一つもないとね、其中でも往來の塵埃なんぞに、肺病の蟲がまざつて、鼻なかへ飛込むのを、髯がね、つまり玄關番見たやうなもので、喰留めて入れないんだつさ。見得でも何でもないけれど、身體のために生したと、さういつたよ。だから衛生髯だわね。」

おほゝゝ。」

お貞は片手を口にあてつ。少年も噴出だしぬ。

「いくら衛生のためだつて、あの髯だけは廢止ば可いなあ。まるで（ちよいとこさ）に肖てるも

のを、髯があるから尚そつくりだ。」

お貞は眉を打顰めて、

「嫌だよ、芳さんは。（ちよいとこさ）は餘

りだわ。でも（ちよいとこさ）と言へば此間、

小橋の上で、あの（ちよいとこさ）の飴屋に逢

つたの。丁ど其時だ。櫻に中の字の徽章の着いた學

校の生徒が三人連で、向うから行き違つて、一件を

見ると聲を揃へて、

（やあ、西岡先生。）と大笑をして行き過ぎた

が、何のこつた知らんと、當座は氣が着かずに居た

つけがね。何だとさ、學校ぢやあ、皆がもう良人に、

（ちよいとこさ）と謂ふ澤名を附けて、蔭ぢや

あ、さうとほか言はないさうだよ。」

一少年は頭を掉れり。

「何の、蔭でいふくらゐなら優しいけれど、髯が

ね、あの學校の雇になつて、はじめて教場へ出た時

に、誰だつけか、（先生、先生の御姓名は？）

と聞いたんだつて。するとね、ちやうど、後れて

溜から入つて來た、遠藤ツて、そら知つてるだらう。

僕の處へもよく遊びに来る、肩のあがつた、武者修行のやうな男。」

「あゝ、あゝ、鐵扇でものをいふ人かえ。」

「うむ、彼奴さ、彼奴がさ。髯の傍へづいと出て、席から名を尋ねた學生に向つて、（おい、君、此先生か。此先生なら左様だ、名は「チヨイトコサ」だ。）と謂つたので、組一統がわツといつて笑つたつて、里見がいつか話したつけ。」

お貞は溜いきをもらしたり。

「嫌になつちまふ！ぢや、まるで、のつけから安く踏まれて、馬鹿にされ切つて居たんだね。」

「でもなかにや彼如見えても、なか／＼學問が出るんだつて、さういつてる者もあるんだ。何しろ、教場へ出て来ると、禮式もないで、突然、ぼうるどに問題を書出して、

（靴琴これを。）

といつたきり椅子にかゝつて、かう、少しうつむいて、肱をついて、黙つて居るツて。呼ばれた番號の奴は災難だ。大きに下稽古なんかして行かなかうものなら、面くらつて、（先生私には出来ませ

で）といつて見ても返事をしない。其まゝうち
やつて置くもんだから、しまひにやあ泣聲で、
（私には出来ません、先生々々。）と呼ぶと、顔
も動さなけりや、見向きもしないで、（遣つて試
るです。）といふツきりで、取附島も何にもない
と。それでも遣つて見ても出来さうもない奴は、立
つたり、居たり、ぼうるどの前へ出ようとして中戻
をしたたり、愚圖々々迷誤ついでる間に、柝が鳴つて、
時間が濟むと、先生は其まんまでフイと行つてしま
ふんだツて。そんな時あ問題を一つ見たばかりで、
一時間まる遊び。

「だから、西岡は何でも一方に超然として、考へて居ることがあるんだらう。えらい！ といふ者もあるよ。」

お貞は

「何の。」といひ顔色。

「考へてるツて、大方内のことばかり考へて、何をしても手が附かないで居るんだらう。聞いて御覽、芳さんが来てからは、また考へやうが一層きびしいに相違ないから。何だつて、また彼の位、嫉妬深い人もないもんだね。」

前にも談した通り、旦那はね、病氣で歸省をしてから、それなり大學へは行かないで、唯ぶら／＼して居たもんだから、澤山ないお金子も坐食の體でなくなるし、たうとう先に居た家を賣つて、去々年この家へ引越したの。

其でもまあ方々から口があつて、皆な相當で、惡

くもなくつて、中でも新潟縣だつた、師範學校のね
芳さん、校長にされたのよ。校長は可いけれど、私
は何だか一緒に居るのが嫌だから、金澤に残ること
にして、旦那ばかり、任地へ行くやうにと言ふ相談
をしたが不可なくつて、たうとう新潟くんだりまで、
引張り出されたがね。何ういふものか、嫌で、嫌で、
片時も居たゝまらなくツてよ。金澤へ歸りたい／＼
で、例の持病で、氣が滅入つちやあ泣いてばかり。

旦那が學校から歸つて來ても、出迎もせず俯向い
ちやあ泣いてるもんだから、

（あゝ、またか。）となさけなさうに言つちや
あ、しをれて書齋へ入つて行つたの。別につらあて
といふんぢやあ決してなかつたんだけれど、眞個に
歸りたかつたんだもの。

旦那もたうとう我を折つて（それぢやあ歸るが
可い、）といふお許しが出ると、直ぐに元氣づい
て、はき／＼して、五日ばかり御膳も頂かれなかつ
たものが、急に下婢を呼んで、（直ぐ腕車夫を見
ておいで。）さ、其が夜の十時すぎだから恐しい
ぢやあないかえ。何だか狂人じみてるねえ。

旦那を残し、坊やは其時分五歳でね、それを連れて金澤へ歸ると、さつぱりして其居心の可かたつちやあない。坊もまた大變に喜んだのさ。

其がといふと、坊やも乳兒の時から父親にやあ少とも馴染まないで、少しものごゝろが着いて來ると、顔を見ちや泣出してね。草履を穿いて、ちよこゝ、戸外へ遊びに出るやうになると、情ないぢやあないかえ。家へ入らうとしちやあ、何時でもさ、外戸の隙からそつと透見をして、小さな口で、（母様、父様家に居るの？）と聞くんだよ。

（あゝ。）と返事をする、其まゝ家へ入らないで、ものゝ欲くなつた時分でも、また遊びに行つてしまつて、父様居ない、といふと、いそゝ入つて來ちやあ、私が針仕事をして居る肩へつかまつて。
「

と聲に力を籠めたりけるが、追愛の情の堪へ難かりけむ、ふる／＼と身を震はし、見る／＼面の色激して、突然長火鉢の上に蔽はれ懸り、眞白き雪の腕もて、少年の頸を搔抱き、

「こんな風に。」

ともものぐるはしく、眞面目になりたる少年を、惚々と打まもり、

「私の顔を覗き込んだやあ、（母様） ツて、

（母様） ツて呼んでよ。」

お貞は太く激しをれり。

「而してね、（父様が居ないと可いねえ。）

ツて、何時でも、さう言つたわ。」

言懸けてうつむく時、弛き前髪の垂れけるにぞ、

うるさげに搔上ぐるとて、漸く少年にからみたる、

其腕を解きけるが、なは渠が手を握りつゝ、

「其様時ばかりぢやあないの、私が何かくさ／＼

すると、可哀相に兒にあたつて、叱咤ツて、押入へ

入れて置く。あとで旦那が留守になると、自分でそ

ツと押入から出て来てね、そツと拔足かなんかで、

私のそばへ寄つて来ちやあ、肩越に顔を覗いて、

（母様、父様が居ないと可いねえ） ツさ。五歳や

六歳で死んで行く兒は、眞個に賢いのね。女の兒は

また格別情愛があるものだよ。だからもう世の中が

つまらなくツて、つまらなくツて、仕様がなかつた

のを、兒こどものせゐで紛まぎれて居ゐたがね、去年きよねん（じふてりや）で亡なくなつてからは、私わたしやもう死しんでしまひたくツて堪たまらなかつたけれど、旦那だんなが馬鹿ばかにおとなしくツて、くわツと喧嘩けんくわすることがないものだから、身み投なげに駈かけ出す機をりがなくなつて、ついぐづ／＼で活いきてたが、芳よつちゃん、お前まへに逢あつてから、私わたしや死しにたくなくなつたよ。」

と、ぢつと其その手てをしめたるトタンに靴音くつおと高く戸とを開あけたり。

お貞はいかに驚きしぞ、戸のあくともろともに器械の如く刎ね上りて、夢中に上り口に出迎へつ。蒼蒼となりて瞳を据ゑたる、沓脱の處に立ちたるは、洋服扮装の紳士なり。頤細く、顔圓く、大きき過ぎたる鼻の下に、賤しげなる八字髭の上唇を蔽はむばかり、濃く茂れるを貯へたるが、面との配合を過れり。眼はいと小さく、毗垂れて、あるかなきかを怪むばかり、殊に眉毛の形亂れて、墨をなすりたる如くなるに、額には幾條の深く刻める皺あれば、實際よりは老けて見ゆいべき、年紀は五十の前後ならむ、其顔に目金を懸け、黒の高帽子を被りたるは、これぞ（ちよいとこさ）といふ動物にて、うはさせし人の影なりける。

良夫と誤り、良夫と見て、胸は早鐘を撞く如き、お貞は其良人ならざるに腹立ちけむ、面を赤め、瞳を据ゑて、吃と其面を瞻りたる、來客は帽を脱して、恭しく一禮し、右手に提げたる革靴の中より、小き旗を取出して、臆面もなくお貞の前に差出しつ。

「日本大勝利、萬歳。」

と謂ひたるのみ、顔の筋をも動かさで、（ちよいとこさ）は反身になり、濟し返りて控へたり。

渠が斯の如くなす時は、二厘三厘思ひ／＼に、其掌上に投げ遣るべき金澤市中の通者となりをれる僥倖なる漢なりき。

「ちよいとこ、ちよいとこ、ちよいとこさ。」

と渠は、もと異様なる節を附し兩手を掉りて躍りながら、數年來金澤市内三百餘町に飴を賣りつゝ往來して、十萬の人一般に、よく其面を認められたるが、征清のことありしより、渠は活計の趣向を變へつ。即ち先の如くにして軒毎を見舞ひあるき、伶俐に米鹽の料を稼ぐなりけり。

渠は常にものいはず、極めて生眞面目にして、人の其笑へるをだに見しものもあらざれども、式の如き白癡者なれば、侮慢は常に嘲笑となる、世に最も賤まるゝ者は時としては滑稽の材となりて、金澤の人士は一分時の笑の代にとて、渠に二三厘を拂ふなり。

お貞は漸く胸を撫で、冷かに舊の座に直りつ。
代價は見てのお戻りなる、この滑稽劇を見物しながら、
「いまだ木戸錢を拂はざるにぞ、」ちよいとこ
「さは身動きだもせで、其まゝ其處に突立ち居れ
り。」

良ありてお貞は心付きけむ、長火鉢の引出を明けて、
渠に與ふべき小錢を探すに、少年は傍よ、

「姉さん、湯錢のつりがあるよ、おい。」

と板敷に投出せば、（ちよいとこさ）は手に取りて、
高帽子を冠ると齊しく、威儀を正して出てゆ
きたり。

出行く（ちよいとこさ）を見送りて、二人は
思はず眼を合しつ。

「なるほど肖て居るねえ。」

とお貞は推出すが如くに言ふ。少年は其には關せず。

「まあ、それから何うしたの？」

渠は聞くことに實の入りけむ、語る人を促せり。

「さあ其新潟から歸つた當座は、坊やも――

名は環といったよ――環も元氣づいて、いそ／

ゝして、嬉しさうだし、私も日本晴がしたやうな心

持で、病氣も何にもあつたもんぢやあないわ。野へ

行く、山へ行くで、方々外出をしてね、大層氣が浮

いて可い心持。

出来るもんなら何時までも旦那が居ないで、環と
二人ツきり暮したかつたわ。

だがねえ、芳さん、浮世はまゝにならないものと
は詮じ詰めたことを言つたんだね。二三度旦那から
手紙を寄越して、（奉公人ばかりぢや、緊が出来

ない、病氣が快くなつたら直ぐ来てくれ。と頼むやうにいつて来て、何の、彼のツて、行かないもんだから、お聞きよ、まあ、何うだらうね。行つてから三月も経たない内に、辭職をして歸つて来て、（なるほどお前なんざ、とても住めない、新潟は水が悪い） ツさ。まあ！

するとまた環がね、何ういふものか、はき／＼しない、嫌にいぢけツちまつて、悪く人の顔色を見て、私の十四五の時見たやうに、隅の方へ引込んで、うじ／＼するから、私もつい氣が減入つて、癩癩が起るたんびに、罪もないものを……と涙を浮め、お貞はがツくり俯向きたり。

「其癖、旦那は、環々ツて、まあ、何様に可愛がつたらう。頭へ手なんざ思ひも寄らない、睨める眞似をしたこともなかつたのに、却つて私の方が癩癩を起しちや、（母様）と傍へ來るのを、（え、も、うるさいねえ、）といつて突飛ばして遣ると、旦那が、（咎もないものを何故そんなことをする）てツて、私を叱るとね、（母

様を叱つては嫌よ、御免なさい／＼）と庇つてく
れるの。而して、（あんな母様は不可喃、此方へ
来い）と旦那が手でも引かうもんなら、其こそ大
變、わツといつて泣出したの。

（あ、あ。）と旦那が大息をして、ふいと戸外
へ出てしまふと、後で、そつと私の顔を見ちやあ、
さも／＼何うも懐しさうに、莞爾と笑ふ。其また愛
くるしさツちやあない。私も思はず莞爾して、引ツ
たくるやうに膝へのせて、しつかり抱しめて頬をお
ツつけると、嬉しさうに笑ツちやあ、（父様が居
ないと可い）と、それまたお株を言ふぢやあない
かえ。

だもんだから、つい私もね、何だか旦那が嫌にな
つたわ。でも或時、
（お貞、吾も環にや血を分けたもんだがなあ。）
とさも情なさうに言つたのには、私も堪らなく氣
の毒だつたよ。

前世の敵同士でもあつたものか、芳さん、環が

ジフテリヤでなくなる時も、私がやる水は、かぶり
つくやうにして飲みながら、旦那が薬を飲ませよう
とすると、ついと横を向いて、頭を掉つて、私にし
がみついて、懐へ顔をかくして、いや、を、したも
んだから、つひで荒い言をいつたこともない旦那が、
何と思つたか血相を變へて、

（不孝者！）といつて、握舉で突然環をぶたう
としたから、私も屹となつて、片膝立て、

（何をするんです！）と摺寄つたわ。其時の形
相の凄じさは、ま、何の位であつたらうと、自分で
も思ひ遣られるよ。言悪いことだけれど、眞實にも
う旦那を喰殺して遣りたかつたわね。今でも旦那を
環の敵だと思ふもの。彼の父親さへ居なけりや、何
だつて環が死ぬものかね、死にやあしないわ、私ば
かりの兒だつたら。」

お貞はしばらく黙したりき。良あり思出したらむ
かの如く、

「旦那は其まゝ崩折れて、男泣きに泣いたわね。

私やもう泣くことも忘れたやうだつた。え、芳

さん、環たまきがなくなつてから、また二に三さん度も方々ほう／＼へいゝ
役やくに着ついたけれども、金澤かなざはなら可いいが、皆みんなな遠所とほくな
ので、私わたしは何どういふものか遠所とほくへ行ゆくと頻しきりに金澤かなざはが
戀こひしくなつて、歸かへりたい／＼一心いっしんでね、濟すまないこ
とだとは思おもつて見みても、我慢がまんがし切きれないのを、無む
理りに堪こたへると、持病ぢびやうが起おこつて、わけもないことに泣な
きたくなつたり、飛とんだことに腹はらが立たつたりして、
まるで夢中むちゆうになるもんだから、仕方しかたなしに歸かへつて來く
ると、旦だんな那あとも後あとからまた歸かへる、何なんでも私わたしをば一人ひとりで
手放てばなして置おく譯わけにやゆかないと見みえて、始終しじゆう一いっ所に
居あたがるわ。

だもんだから何處どこも良いい處ところには行ゆかれないで、金かな
澤ざはぢや、あんなつまらない學校がくかいへ、腰辨當こしべんたうとふしが
ない役やくよ。」「

と一人ひとり冷ひやかに笑わらうたり。

「何もそんなに氣を揉まなくツても、よささうなもの。旦那はね、まるで留守のことが氣に懸るために出世が出来ないのだ、といつても可いわ。」

そんなに私を思つてくれるもんだから、夜遊はせず、眞個のこツたよ、夫婦になつてから以來、一晩も宅を明けたことなしさ。學校がひければ、ちやんともう、道寄もしないで歸つて來る。尤も無口の人だから、口ぢや何ともいはないけれど、何時もむづかしい顔を見せたことはなし、地體がくすぶつた何しろ、（ちよいとこさ）といふのだもの。それだが、眼が小さいから些少あ彼でも愛嬌があるよ。荒い口をきいたことなし、すりや私だつて、嫌だ、嫌だとはいふものゝ、何處がといつちやあ返事が出來ない。けれども嫌だから仕様がないわ。

それだから私も、なに言ふことに逆らはず、良人は矢張良人だから、嫌だつても良人だから、良人のやうに謹んで事へて居るもの。さう疑ぐるには及ばないぢやあないかね。芳さん、芳さんの姉様がひど

くされたやうでも困るけれど、男はちつたあ男らしく、偶には出歩行でもしないとね、男に意氣地がないやうで、女房の方でも頼母しくなくなるのよ。

其を旦那と来た日にやあ、ちよいとの間でも家に居て、私の番をして居たがるんだわ。其も私が行届かない故だらうと、氣を着けちやあ居るし、其上もう私は旦那の犠牲だとあきらめてる。分らないながらも女の道なんてことも聞いてるから、浮氣らしい眞似もしないけれど、芳さん、あの人の弱點だね。其がために出世も出来ないなんといった日にや、私や一層可哀相だよ。あはれだよ。

何の密犬の七人ぐらゐ、疾くに出来ないぢやあなかつたが ……

といひかけしがお貞はみづから其言過しを恥ぢたる色あり。

「これは話さ。」
と口輕に言消して、

「何も見張つて居たからたつて、しやうのあるもんどぢやあないわね。」

お貞は面晴々しく、しをれし姿きりゝとなりて、
其音調も氣競ひたり。

「しかしね、芳さん、世の中は何といふ無理なものだらう。唯式三獻をしたばかりで、夫だの、妻だのツて、妙なものが出来上つてさ。女の身體はまるで男のものになつて、何をいはれてもはい／＼ツて、従はないと、イヤ、不貞腐だの、女の道知らないのと、世間で種々なことをいふよ。

折角お祖父さんが御丹精で、人並に育つたものを、唯で我ものにしてしまつて、誰も難有がりもしないぢやないか。

其で居て婦人はいつも下手に就いて、無理も御道理にして通さねばならないといふ、そんな勘定に合はないことツちやあ、あるもんぢやない。何處かへ行かうといつたつて、良人がならないといへば、唯起てといへば、唯、寝るといはれりや其も、唯、だわ。

人間一人を縦にしようが、横にしようが、自分の

好きなまゝにして置きながら、まだ不足で、譬へば芳さんと談話をするにはならぬといはれりや、矢張り快く落着いて談話も出来ないだらうぢやないかね。

一體操を守れたの、良人に従へだのといふ、掟かなんか知らないが、さういつたやうなことを極めたのは、誰だと、まあ、お思ひだえ。

一遍婚禮をすりや疵者だの、離縁るのは女の恥だのツて、人の身體を自由にさせないで、死ぬよりつらい思ひをしても、一生嫌な者の傍についてなくツちやあならないといふのは、何ういふ理窟だらう、わからないぢやないかね。

まさか神様や、佛様のおつげがあつたといふ譯でもあるまいがね。もと／＼人間がさういふことを拵へたのなら、誰だつて同一人間だもの、何密夫をしてても可い、駈落をしても可いと、言出した處で、それが通つて、世間がみんなさうなれば、却つて貞女だの、節婦だの、といふものが、爪はじきをされようも知れないわ。

旦那は、また、何の徳があつて、私を自由にする
んだらう。すつかり自分のものにしてしまつて、私
の身體を縛つたらうね。食べさして置く故だといへ
ば、私や一人で針仕事をして、くらしかねること
もないわ。ねえ、芳さん、芳さんてばさ。」
少年は太くこの答に窮して、一言もなく聞きたり
けり。

お貞はなほも語勢強く。

「眞個に蟲のいゝ談話ぢやないかね、それとも私の方から、良人になつて下さいつて、頼んで良人にしたものなら、そりや何様ことでも我慢が出来るし、些少も不足のあるもんぢや無いが、私と旦那なんざ、え、芳さん、夫にした妻ではなくつて、妻にした良人だものを。何も私が小さくなつて、いふことを肯いて縮んで居る義理もなし、操を立てるにも及ばないぢや無いか。

芳さんとだつて左様だわ。何もなかをよくしたからとつて、不思議なことはないぢやあないかね。此間騒ぎが持上つて、芳さんがソレ駈出した、あの時でも、旦那がいる／＼むづかしくいふからね、（はい、芳さんとは姉弟分になりました。何ういふ縁だか知らないけれど、私が銀杏返に結つて居ますと、亡なつた姉様に肖てるつて、彼の兒も大層姉おもひだと見えまして、姉様々々つて慕つてくれますもんですから、私もつい可愛くなります。）と無

理だとは言はれないつもりで言つたけれど、（他
人で、姉弟といふがあるものか）ツて、眞底から
料簡しないの。傍に居た伯父さんも、伯母さんも、
矢張おんなじやうなことを言つて、（ふむ、そん
なことで世の中が通るものか。言やうもあらうのに、
ナニ姉弟分だ。）と斯うさ。口惜しいぢやあない
かねえ。芳さん、たとひ芳さんを抱いて寝たからた
ツて、二人さへ潔白なら、其で可いぢやあないか、
旦那が何と言つたつて、私やちつとも構やしない
わ。」

お貞は恚謂へりしまで、血色勝れて、元氣よく、
いと心強く見えたりしが、急に語調の打沈みて、
「しかし斯うはいふものゝ、芳さん世の中といふ
ものがね、それぢやあ合點しないとさ。たとひ芳さ
んと私とが、何様に潔白であつたからつても、世間
ぢやさうとは思つてくれず、（へむ、腹合せの姉
弟だ。）と一萬石に極つちまふ！ 旦那が悪いと
いふでもなく、私と芳さんが悪いのでもなく、唯惡
いのは世間だよ。」

どんなに二人が潔白で、心は雪のやうに清くツて
もね、泥足で踏みにじつて、世間で汚くしてしまふ
んだわ。

雪といへば御覽な、冬になつて雪が降ると、此處
の家なんざ、裏の地面が畠だからね、木戸があかな
くツて困るんだよ。理窟を言へば同一で、垣根にあ
るだけの雪ならば、無理に推せば開くけれど、ずツ
とむかうの畠から一面に降つゞいて、其力が同一に
なつて、表からおすのだもの。何うして、何といは
れても、世間にやあ口が開かないのよ。

男の腕なら知らないこと、女なんざ其を無理にこ
じあげようとすると、呼吸切がしてしまふの。38
でも芳さんは士官になるといふから、今に大將にで
もおなりの時は、其力でいくらも世間を負かしてし
まつて、何にも言はさないやうに出来もしようけれ
ど、今といつちやあ唯た二人で、何うすることもな
らないよ。

其とも神様や佛様が、私だちの手傳をして、力を

添へて下さりや可いけれど、そんな願はかなはない
わね。

婆々じみるツて芳さんはお笑ひだが、芳さんなぞ
は其思遣があるまいけれど、可愛い兒でも亡くして
御覽、そりやおのづと後生のことも思はれるよ。

あれは、えらい僧正だつて、旦那の勧める説教を
聞きはじめてから、方々へ参詣つたり、教を聞いた
りするんだがね。なるほどと思ふことばかり、それ
でも世の中に逆らツて、それで、御利益があるツて
ことは、些少も聞かしちやあくれないものを。

戸を推ツつけてる雪のやうな、力の強い世の中に
逆らツて行かうとすると、そりや弱い方が殺れツち
まふわ。さうすりやもう死ぬより他はないぢやない
かね。

私ももうノ、死んでしまひたいと思ふけれど、そ
れがまたさうも行かないものだし、このごろぢや芳
さんといふ可愛いものが出来たからね、私や死ぬこ
とは嫌になつたわ。眞個さ！ 自分の兒が可愛いと
か、芳さんと斯うやつて談話をするのが嬉しいとか、

何でもなん樂たのしみなことさへありや、たとひつら辛くツても、我がま
幔まんが出来できるよ。何どうせ、私わたしは意氣地いきぢなしで、世間せけんに
負まけて居あるからね、そりや旦那だんなは大事だいじにもする、病やま
氣ひが出るでほど嫌いやな人ひとでも、世間よのなかにや勝かたれないから、
たとひ旦那だんなが思おもひ切きつて、縁えんを切きらうといつてもね、
どんな腹はらいせでも旦那だんなにさせて、私わたしや、あやまつて
出でて行ゆかない。ー

と齒はをくひしめてすゝり泣なきつ。

お貞は幾年來獨り思ひ、獨り惱みて、鬱積せる胸中の煩悶の、其一片をだに嘗て洩せしことあらざりしを、いま打明くることなれば、順序も、次第も前後して、亂れ且つ整はざるにも心着かで、再び語り續けたり。

「いつちや女の愚癡だがね。私はさつきいつたやうに、世の中といふものがあつて、自分ばかりぢやないからと、斷念めて、旦那に事へては居るけれど、一日に幾度となく、もうふツ／＼嫌になることがあるわ。」

芳さんも知つておいでだ。つい此間のことだつけ、晩方旦那の友達が來たので、私も其日は朝ツから、鹽梅が悪くツて、奥の室に寢て居た處へ、推懸けたもんだから、外に別に部屋はなし、こゝへ出て坐つて居たの。

お客がまた私の大嫌な人で、旦那とは合口だもん

だから、愉快さうに話してたツけが、私は頭痛がして居た處へ、其聲を聞くとなほ鹽梅が悪くなつて、胸は痛む、横腹は筋張るね、おひ／＼薄暗くはなつて来る。暑いといふので燈火はつけずさ。陰氣になつて、いろんなことを考へ出して、つい堪らなくなつたから、横にならうと思つても、直ぐ背後に居るんだもの、立膝も出来ないから、臺所へ行つて板の間にもと思つたが、彼處にや蚊が酷いし、仕方がないから戸外へ出て、軒下にしゃがんで泣いてた處へ、丁どお前さんが来ておくれで、二階へ来いとおひだから、そつと上ると、まあ、おとしよりが御深切に、胸を押して下すつたので、私やもう難有くツて、嬉しくツて、心ぢや手を合せて拝んだわ。おかげでやつと胸が開きさうになつて、ほつと呼吸をついた處へ、

（貞は其處に參つてをりませうな。）と、壇階子の下へ来て、わざ／＼旦那が呼んだぢやあないかね。

私や餘りくさ／＼したから、返事もしないで黙つ

て居ると、おばあさんがお聞きつけなすツて、階下へおいで、ね、ね、さうしないと悪い）ツて、皆なもうちゃんと推量して、やさしく言つて下さるんだもの。

（此處に居たうございます！）と、おばあ様の膝に縋りついたので。

下ではなは呼ぶもんだから、おばあさんが私のかはりに返事をなすツて、

（可いから、可いから。）と、低聲でおつしやつてね、背を撫で、下さるもんだから、仕方なしに下りて行くと、お客はもう歸つて居てね、嫌な眼で睨まれたよ。

空いてる室がないもんだから、さういふ時には困つちまふ。アレ悪く取つちやあ困るわね。

何も芳さんに二階を貸して置いて、斯ういつちやあわるいけれど、はじめツから此家は嫌ひなの。

水は悪いし、流許なんざ湿地で、いつでもじく／＼して、心持が悪いつちやあない。雪どけの時分に

なると、庭が一杯水になるわ。それから春から夏へかけては李の樹が、毛蟲で一杯。

其に宅中陰氣でね、明けて置く、と往來から奥の
室まで見透しだし、こゝいら場末だもんだから、い
や、彼處の宅は何うしたの、斯うしたのと、近所中
で眼を着けて、晩のお菜まで知つてるぢやあないか
ね。大嫌な猫がまた五六疋、野良猫が多いので、の
そ／＼入つて、づう／＼しく上り込んで、追つても
にげるやうな優しいんぢやない。

隣の小猫はまた小猫で、それ井戸は隣と二軒で使
ふもんだから、あすこの隔から入つて來ちや、疊で
も、板の間でも、ニヤア／＼鳴いて歩行くわ。

隣の猫のこつたから、あのまた女房が大抵ぢやな
いのだからね、（家の猫を）なんて言はれるが
嫌さに、打つわけには固よりゆかず、二三度干物で
も遣つたものなら、可いことにして、まつはつて、
からむも可いけれど、芳さん、ありや猫の疱瘡とで
もいふのか不知。からだぢう一杯のできもので、一々

膿うみをもつて、まるで、毛けが抜ぬけて、肉にくがあらはれて
ね、汚きたなくつて手てもつけられないよ。其それがさ、昨夜ゆうべ
も蚊帳かやの中なかへ入は込んで、寝ねて居あいた足あしをなめたのよ。
何なんの因果いんぐわだか、もうノ、猫ねこにまで取と着ツかれる。」「
と投なぐるが如ごとく言いひすてつ。苦笑にがわらひして呟つぶやきたり。
「ほんとうに泣なくより笑わらひだねえ。」

お貞の言途絶えたる時、先刻より一言も、ものいはで渠が物語を味ひつゝ、是非の分別にさまよへりし如き芳之助の、何思ひけむ呵々と笑ひ出して、

「はゝゝ、姉様は陰辨慶だ。」

お貞は意外なる顔色にて、

「芳さん、何が陰辨慶だね。」

「だつて其様に決心をして居ながら、一體僕の分らないと謂ふのはね、人ががらりと戸を明けると、眼に着くほどびつくりして、どきり！ する様子か確に見えるのは、何ういふものだらう。髯の留守に僕と談話でもして居る處へ唐突に戸外があけば、いま姉様がいつた世間の何とかで、吃驚しないにも限らないが、斯うして見るに、何にも其時にや限らないやうだ。何時でも左様だから可笑いぢやないか。」

それに姉様のは口でいふと反對で、髯の前ぢやおど
ノ、して、何だか無暗に小さくなつて、一言ものを
いはれても、はツと呼吸のつまるやうに、おびえ切
つて居る癖に、今僕に話すやうぢや、酸いも、甘い
も、知つて居て、旦那を三錢とも思つてやしない。
僕が二厘の湯錢の剩錢で、（ちよいとこさ）を
追返したよりは、なは酷く安くしてるんだ。其癖、
世間ぢや、（西村の奥様は感心だ。今時の人のや
うでない。まるで嫁にきたてのやうに、旦那様を大
事にする。婦人は如彼行かなければ嘘だ。貞女の鑑
だ。しかし西村には惜いものだ。）なんとさう言
つてるぞ。さうすりや世間も恐しくはなからうに、
何だつて、あんなにびくノ、するのかなあ。だから
姉様は陰辨慶だ。」
と罪もなくけなしたるを、お貞は聞きつゝ微笑み
たりしが、不圖立ちて店に出で行き、往來の左右を
視め、舊の座に歸りて四邊を三し、また板敷に伸上
りて、裏庭より勝手などを、巨細に見て座に就きつ。

「其はね、芳さん、斯うなのよ。」といふ聲も八
やふるへたり。

「芳さんだと思つて話すのだから、さう思つて聞いておくれ。」

私はね、可いかい。其つもりで聞いておくれ。私はね、何時頃からといふ確なことは知らないけれど、いろんな事が重り／＼してね、旦那が、旦那が、何うにかして。

死んでくれりやい。死んでくれりやい。死ねばい。死ねばい。死ねばい。

とさう思ふやうになつたんだよ。あ、罪の深い、呪詛ふのも同一だ。親の敵でもあることか、人並より私を思つてくれるものを、（死んでくれりやい）と思ふのは、何うした心得違ひだうと、自分で自分を叱つて見ても、矢張何うしてもさう思ふの。

其念が段々嵩じて、朝から晩まで、寝てからも同一ことを考へて、何うしても其了簡がなほらないで、なにも後暗いことはないけれど、何に着け、彼に着け、一寸の間も其念が離れやしない。始終其ばかりが氣にかゝつて、何をしても手に着かないしね、ぢつと考へこんで居る時なんざ、なほのこと、何に

も思はないで其事ばかり。あゝ、人の妻の身で、何たる恐しい了簡だらうと、心の鬼に責められちやあ、片時も氣がやすまらないで、始終胸がどき／＼する。其がといふと、私の胸にあることを、人に見付かりやしまいかと、左様思ふから恐怖んだよ。

わけても、旦那に顔を見られるたびに、あの眼が、何だか腹の中まで見透すやうで、おど／＼しずには居られない。

(貞) ツて一聲呼ばれると、直ぐその、あとの句が、(お前、吾の死ぬのが待遠いだらう。)
とかう来るだらうと思ふから、はツとしないぢや居られないわね。其で何ぞ外のことを言はれると、ほツと氣が休まつて、其嬉しさつちやないもんだから、用でも、何でも、いそ／＼する。

其れにかうやつて、こゝへ坐つて、一人でものを考へてる時は、頭の中で、ぐる／＼／＼／＼、(死ねば可い) といふ、鬼か、蛇か、何ともいはれない可恐いものが、私の眼にも見えるやうに、眼

前に駈まはつて居るもんだから、自分ながら恐しく
ツて、觀書様を念じて居るの。そこへがらりと戸を
開けられちやあ、何うして慌てずに居られよう。
（あゝ、めツかつた。） と、もう死んだ氣になつ
ちまふ！

其が心配で、心配で、何うぞして忘れたいと思ふ
から、けもないことにわあ／＼騒いだり、笑つたり、
餘所めには、さも面白さうに見えようけれど、自分
ぢや泣きたいよ。あとではなほさら氣がめいつて、
唯しよんぼりと考へ込むと、また、いつもの（死
ねばいゝ）が見えるやうなの。

恐しくツて堪まらないから、何うぞ此念がなくな
ります様にと、觀音様に願つても、罪が深いせいな
のか、段々強くなるばかり。

氣のせぬか知らないけれど、旦那は日に／＼血色
が悪くなつて、次第に弱つて行く様子、こりや思ひ
が届くのかと考へると、私やもう居ても起つても堪
らない。

だから旦那が煩ひでもすると、ハツと思つて、こりや何うでも治さないと、私が呪殺すのだと、もう／＼左ほどもない病氣でも、夜の目も寝ないで介抱するが、お医者様のお薬でも、私の手から飲ませると、却つて毒になるやうで、何でも半日ばかりの間は、今にも薬の毒がまはつて、血でも吐きやしないか不知と、何うして其間が心配とふものは！でも其でもやつぱり考へることといつたら、ちつとも違はない、（死ねば可い。）で、早くなほつて欲しいのは、實は（死ねば可い。）と思ふからだよ。

ねえ、芳さん分つたらう。もう胸が一杯で、口も利かれやしないから、後生だ、推量しておくれ。も、私や、私はもう芳さん何うしたら可いんだねえ。」と身を震はしたるいぢらしさ！

お貞がこの衷情に、少年は太く動かされつ。思はず暗涙を催したり。

「あゝ姉様は可哀さうだねえ。僕が、僕が、僕が、何うかしてあげようから、姉さん死んぢやあ不可い

よ。
「

お貞は聞きて嬉しげに少年の手をぢつと取りて、

「嬉しいねえ。何の自害なんかするもんかね、世間と、旦那として私をこんなにいぢめるもの。いぢめ殺されて負けちゃ卑怯よ。意氣地が無いわ。可いよ、そんな心配は要らないよ。私や面あてにでも、生きて居る。たとひ此上幾十倍のつらい悲しいことがあつても、吃と堪へて死にやあしないわ。と心強くはいつて見ても、死なれないのが因果なのだねえ。」

ほろりとして見る少年の眼にも涙を湛へたり。時に二階より老女の聲。

「芳や、歸つたの。」

「あれ、おばあさんが。」

「唯、唯今。」

十四

二段ばかり少年は壇階子を昇り懸けて、唯顧みて驚きぬ。時彦は歸宅して、はや上口の處に立てり。

我が座を立ちしと同時にならむ。と思ふも見るもまたくま、さそくの機轉、下を覗きて、

「もう、奥様、何時です。」

「唯。」

とお一貞は起ちたるが、不意に鷗倒して、起ちつ、居つ。うろ／＼四邊を見廻す間に、時彦は土間に立ちたるまゝ、肅然として帶の間より、懷中時計を取り出し、丁寧に見つめて、少年を仰ぎ見むともせず、
「五十九分前六時です。」

「憚様。」

と少年は聲音高く二階に上れり。

時彦は時計を納めつ。立ちも上らず、坐りも果てざる、妻に向ひて、沈める音調、

「貞、床を取つてくれ、気分が悪いぢや。貞、床をとつてくれ、気分が悪いぢや。」

面は死灰の如くなりき。

時彦は其時よりまた起たず、肺結核の患者は夏を過ぎて病勢募り、秋の末つ方に到りては、恢復の望絶果てぬ。其間お貞が盡したる看護の深切は、實際隣人を動かすに足るものなりき。

渠は良人の容體の危篤に陥りより、殆ど一月ばかりの間帯を解きて寝しことあらず、分けて此頃に到りては、一七日未だ嘗て瞼を合さず、渠は茶を断ちて神に祈れり。鹽を断ちて佛に請へり。然れども時彦を嫌惡の極、其死の速かならむことを欲する念は、良人に藥を勧むる時も、其疼痛の局部を擦る隙も、須臾も念頭を去りやらず。甚しい哉其念の深く刻めるや、おのが幾年の壽命を縮め、身を以て神佛の贄に供へて、合掌し、瞑目して、良人の本復を祈る時も、其死を欲するの念は依然として信仰の靈を妨げたり。

良人の衰弱は日に著けきに、こは皆おのが一念よりぞと、深更四隣静まりて、天地沈々、病者の爲に洋燈を廃して行燈にかへたる影晴く、隙間もる風も

あらざるにぞ、そよとも動かぬ灯影にすかして、其
寂たること死せるが如き、病者の面をそと視めて、
お貞は顔を背けつゝ、頤深く襟に埋めば、時彦の死
を欲する念、こゝぞと熾に燃立ちて、殆ど我を制す
る能はず。そがなすまゝに委し置けば、奇異なる幻
影眼前にちらつき、**＝**と火花の散る如く、良人の膚
を犯す毎に、太く絶え、細く續き、長く幽けき呻吟
聲の、お貞の耳を貫くにぞ、あれよ／＼とばかりに
自ら恐れ、自ら悼み、且つ泣き、且つ怒り、且つ悔
いて、殆ど其身を忘るゝ時、

「お貞。」

と一聲、時彦は、鬱し沈める音調もて、枕も上げ
で名を呼びぬ。

この一聲を聞くとともに、一桶の氷を浴びたる如
く、全身の血は冷却して、お貞は、

「唯々。」

と戦きたり。

時彦はいともの静に、

「お前、此頃から茶を断つたな。」

「否、何も貴下、其様なことを。」

と幽かにいひて胸を壓へぬ。

時彦は頤のあたりまで、夜着の襟深く、仰向に枕して、眼細く天井を仰ぎながら、

「鹽斷もしてるやうだ。一昨日あたりから飲も喰べないが、一體何ういふ了簡ぢや。」

（貴下を直したいために） といはむは、渠の良心の許さざりけむ、差俯向きてお貞は黙しぬ。

「あかりが暗い、掻立てるが可い。お前が酷く瘡せツこけて、さうしよんぼりとしてる處は、何う見ても幽靈のやうぢや、行燈が暗い故だらう。な。」

「はい。」

お貞は、深夜幽靈の名を聞きて、ちりけもとより寒さを感じつ。身震ひしながら、少しく居寄りて、燈心の火を掻立てたり。

「其様に身體を弱らせて何うしようといふ了簡なんか。うむ、お貞。」

根深く問ふに包みおほせず、お貞はいとも小さき聲にて、

「よく御存じでございます。」

「むゝ、お前のすることは、一々吾や知つとる

ぞ。
「

「え。」

とお貞は足り退りぬ。

「茶斷、鹽斷までしてくれるのに、吾は何故早く死なんのかな。」

お貞は聞きて興覺顔なり。

時彦の語氣は落着けり。

「疾く死ねば可いと思つて居つて何故そんな眞似をするんだな。」

と聲に笑ひを含めて謂へり。お貞は殆ど狂せむとせり。

病者はなほも和かに、

「何、さう驚くにや及ばない。昨日今日にはじま

つたことではないが、お貞、お前は思つたより遙に恐しい女だな。彼は憎い、憎い奴だから殺したいと

いふことなら、吾も了簡のしやうがあるが、（死んでくれりや可い。）は實に残酷だ。人を殺せば

自分も死なねばならぬといふ先づ世の中に定規があるから、我身を投出して、つまり自分が死んで懸つ

て、而して其憎い奴を殺すのぢや。誰一人生命を惜まぬものはない、生きて居たいといふのが人間第一の目的ぢやから、其生命を打棄てゝ懸るものは、もう望を絶つたもので、こりや、憐むべきものである。

お前のはさうぢやあない。（死んでくれりや可い）と思ふので、つまり精神的に人を殺して、何の報も受けないで、白日青天、嫌な者が自分の思ひで死んでしまつた後は、其こそ自由自在の身ぢやでの、仕たい三昧、一人で勝手に榮耀をして、世を愉しく送らうとか、好きな芳之助と好いことをしようとか、怪しからんことを思つて居る、つまり希望といふものがお前にあるのだ。

人の死ぬのを祈りながら、あと／＼の樂みを思つて居る、そんな太い奴があるもんか。

吾は屹と許さんぞ。

さう／＼好きなまねをお前にされて、吾も男だ、指を叩へて死にはしない。

と何時も思つて居たんだが、もう此肺病には勝たれない、否、つまり、お前に負けたのだ。

して見れば、お貞、お前が呪詛殺すんだと、吾がさう思つても、仕方があるまい。

吾は何の道助からないと、初手ツから斷念めてるが、お貞、お前の望が叶うて、後で天下晴に樂まれるのは、吾は何うしても斷念められない。

謂ふと何だか、女々しいやうだが、報のない罪をし遂げて、あとで樂をしようといふ、轟の可いことは決して無い。また然うさせるやうな吾でも無い。

お貞、謝罪をしちやあ可かんぞ。お前は何も謝罪をすることもなし、吾も別に謝罪を聞く必要も認めんぢや。悪かつたというて謝罪をすれば其で濟む、謝罪を聞けば料簡すると、そんな氣樂なことを思ふと、吾のいふことが分るまいでな。何でもしたことはない、それ相當の報酬といふものが、多くもなく少なくもなく、ちやうど可いほどあるものだ、然う思つてる！ 可いか、お貞、…… お貞。」

と少し急き込みて、絶入るばかりに咽びつゝ、暫時苦痛を忍びしが、がら／＼と血を吐きたり。

何時いつも憚かることのある際さいには、一ひと刀かた浴なびたる如ごとく、
蒼あくなりて縋すがり寄りし、お貞ていは身み動うごきだもなし得えざり
き。

病者びやうしやは自みづから胸むねを抱いだきて、眼まなこを瞑ねむること良よしかりし、
一ひと際きはこ聲こゑの嘖からびつゝ、

「斯かう謂いへばな、親おやを蹴け殺ころした罪人ざいにんでも、一いち應おうは
言譯いひわけをすることが出で來きるものと、お前まへは無む念ねんに思おも
ふであらうが、法廷はふていで論ろんずる罪つみは、囚徒しゅうとが責せき任にんを負お
つてるのだ。

今いまお前まへが言譯いひわけをして、今け日ふから何どんな優やさしい氣きに
ならうとも、とても助たすからない吾われに取とつては、何なんの
利益りえきも無ないことで、死しんでしまへば、それ、お前まへは
日本晴にっぽんばれで、可いいいことをして樂たのむんぢや。然さううまく
は吃きつとさせない。言詳いひわけがましいことを謂いふな。聞き
やうな吾われでもなし。またお前まへだつて然さうだ。人殺ひつじろし
りなほひどい、（死しんでくれれば可いい）と思おもふ
ほどの度胸どきようのある婦人をんなでないか。しつかりとしろー

うむ、お貞てい。」「
お貞ていは吃きつと顔かほを上げ、

「はい、決して申譯はいたしません。」

といと潔よく言放てる、兩の瞳の曇は晴れつ。旭
光一射霜を拂ひて、水仙忽ち凜とせり。

病者は心地好げに頷きぬ。

「可し、よく聞け、お貞。人の死ぬのを一日待
待ち殺して、あとでよい眼を見ようといふはずの
ことだ。考へて見る。お前は今までに人情の上から
吾に數へ切れない借があらう。其をな、其負債をな。
今音に返すんだ。吾は何うしても取らうといふの
だ。」

いと恐しき聲にもおぢず、お貞は一膝乗出して、
看病疲れに繕はざる、亂れし衣紋を繕ひながら、胸
を張りて、面を差向け、

「旦那、何うして返すんです。」

「離縁しよう。いまこゝで、此場から離縁しよう。
死に懸つて居る吾を見棄てゝ、芳之助と手を曳いて、
温泉へでも湯治に行け。だがな、お前は家附の娘だ
から、出て行くことが出来ぬと謂へば、ナニ出て行

くには及ばんから、床ずれがして寝返りも出来ない、この吾を、芳之助と二人で負つて行つて、姨捨山へ捨てるんだ。さ、どちらでも構はない。唯、「人の妻たる者が、死に懸つてる良人を見棄てた。」と斯ういふことが世間へ知れて、世の中の者がみんな其氣でお前に附合へば、それで可い、それで可い。些少は負債が返せるのだ。

しかし、これはお前には出来ぬこつた。お前は世間體といふものを知つてるから、平生、吾が健全な時でも、そんな事は臆にも出さないほどだ。其が出るくらゐなら、もう疾くに離別てしまつたに違ひない。うむ、お貞、何うだ、それとも見棄て、離縁が出来るか。」

お貞は一思案にも及ばずして、「唯、そんなことは出来ません。」

病者は然もこそと思へる状なり。

「其ではお貞、お前の念ひで死なないうちに、

…… 吾を殺せ。」と靜にいふ。

「え、貴下を！」

「うむ、吾を。お貞、ずるい根性出さないで、表

向に吾を殺して、公然、良人殺しの罪人になるのだ。
お貞、良人殺の罪人になるのだ。うむお貞。

吾を見棄てるか、吾を殺すか、うむ、何方にする
な。何でも負債を返さないでは、餘り冥利が悪いで
無いか。いや、ないか處でない！ さうしなけりや
許さんのだ。うむ、お貞、何方にする、殺さないとい
離縁にする！

「いと嚴かに命じける。お貞は決する色ありて、
「貴下、そ、そんなことを、私にいつてもいゝほ

どことがあるんですか。」
「聲ふるはして吃と問ひぬ。」

「應、ある。」
と確乎として、謂ふ時病者は傲然たりき。

お貞は彼の女が時々神經に異變を來して、頭恰も
破るゝが如く、足はわなゝき、手はふるへ、满面蒼
くなりながら、身火烈々身體を焼きて、恍として、
茫として、殆ど無意識に、されど深長なる意味いあ
りて存する如く、満身の氣を眼にこめて、其瞳をも
動かさで、ちつと人を目詰むれば他をして身の毛を

よだたすことある、其時と同一容體にて、目まじろ
ぎもせで、死せるが如き時彦の顔を瞻りしが、俄然、
崩折れて、ふる／＼と身震ひして、飛着く如く良人
に縋りて、血を吐く一聲夜陰を貫き、

「殺します！ 旦那、私はもう……」

とわつとばかりに泣出しぎま、擲たれたらむかの
如く、障子とゞもに僵れ出で、勝手許の暗を探り
て、渠は得物を手にしたり。

時彦ははじめの如く顔の半ばに夜具を被ぎ、仰向
に寝て天井を眺めたるまゝ、此方を見向かむともな
さずして、いとも靜に、冷かに、着物の袖も動かさ
ざりき。

諸君、他日もし北陸に旅行して、次手ありて金澤
を過りたまはむ時、好事の方々心あらば、通りがゝ
りの市人に就きて、化銀杏の旅店？ と問はれよ。
老となく、少となく、皆直ちに首肯して、其道筋を
教へ申さむ。すなはち行きて一泊して、就縛の後に
御注意あれ。

間廣き旅店の客少なく、夜半の鐘聲森として、凄

風一陣身に染む時、長き廊下の最端に、蹇然たる足音あり寂冥を破り近着き來りて、黒きもの颯とうつる障子の外なる幻影の、諸君の寢息を覗ふあらむ。其時聲を立てられな。もし咳をだにしたまはゞば、怪しき幻影は直ちに去るべし。忍びて様子をうかゞひ給はゞ、すつと障子をあくると共に、銀杏返の背向に、あとあし下りに入り來りて、諸君の枕邊に近づくべし。其瞬時眞白なる細き面影を一見して、思はず悚然とし給はむか。トタンに件の幽靈は行燈の火を吹消して、暗中を走る蹇音、遠く、遠く、遠くなりつゝ、長き廊下の盡頭に至りて、其まゝ八々と留むべきなり。

夜はいよ／＼更けて、風寒きに、怪者の再來を慮りて、諸君は一夜を待明かさむ。

明くるを待ちて主翁に會し、就きて昨夜の奇怪を問はれよ。主翁は黙して語らざるべし。再び聞かれよ、強ひられよ、なほ強ひられよ。主翁は拒むこと能はずして、愁然として其實を語るべきなり。

聞くのみにてはあき足らざらんか、主翁に請ひて

ひとま
一室に行け。密閉したる暗室内に俯向き伏したる銀
杏返の、其背と、裳の動かずして、恰もなきがらの
如くなるを、ソト戸の透より見るを得べし。これ蓋
し狂者の舉動なればとて、公判廷より許されし、良
人を殺せし貞婦にして、旅店の主翁は其伯父なり。

されど室内に立入りて、其面を見むとせらるゝと
も、主翁は頑として肯ぜざるべし。諸君涙あらば強
ふるなかれ。いかんとなれば、狂せるお貞は爾來世
の人に良人殺しの面を見られむを恥ぢて、長くこの
暗室内に自ら其身を封じたるものなればなり。渠は
恐懼て日光を見ず、もし強ひて戸を開きて光明其膚
に一注せば、渠は立處に絶して萬事休まむ。

光を厭ふこと斯の如し。されば深更一縷の燈火を
もお貞は恐れて吹消し去るなり。

渠は爾く活きながら暗中に葬り去られつ。良人を
殺せし妻ながら、諸君請ふ恕せられよ。敢て日光を
あびせて以てこの憐むべき貞婦を射殺すなかれ。然
れども其姿をのみ見て面を見ざる、諸君は嘸ぞ本意
なからむ。然りながら、諸君より十層二十層、なほ

幾十層、こゝに本意なき少年あり。渠は活きたるお
貞よりも寧ろ其姉の幽霊を見むと欲して、猶且つ爾
かするを得ざるものをや。

【完】